

【令和4年度】竹富島ゆがふ館学習会

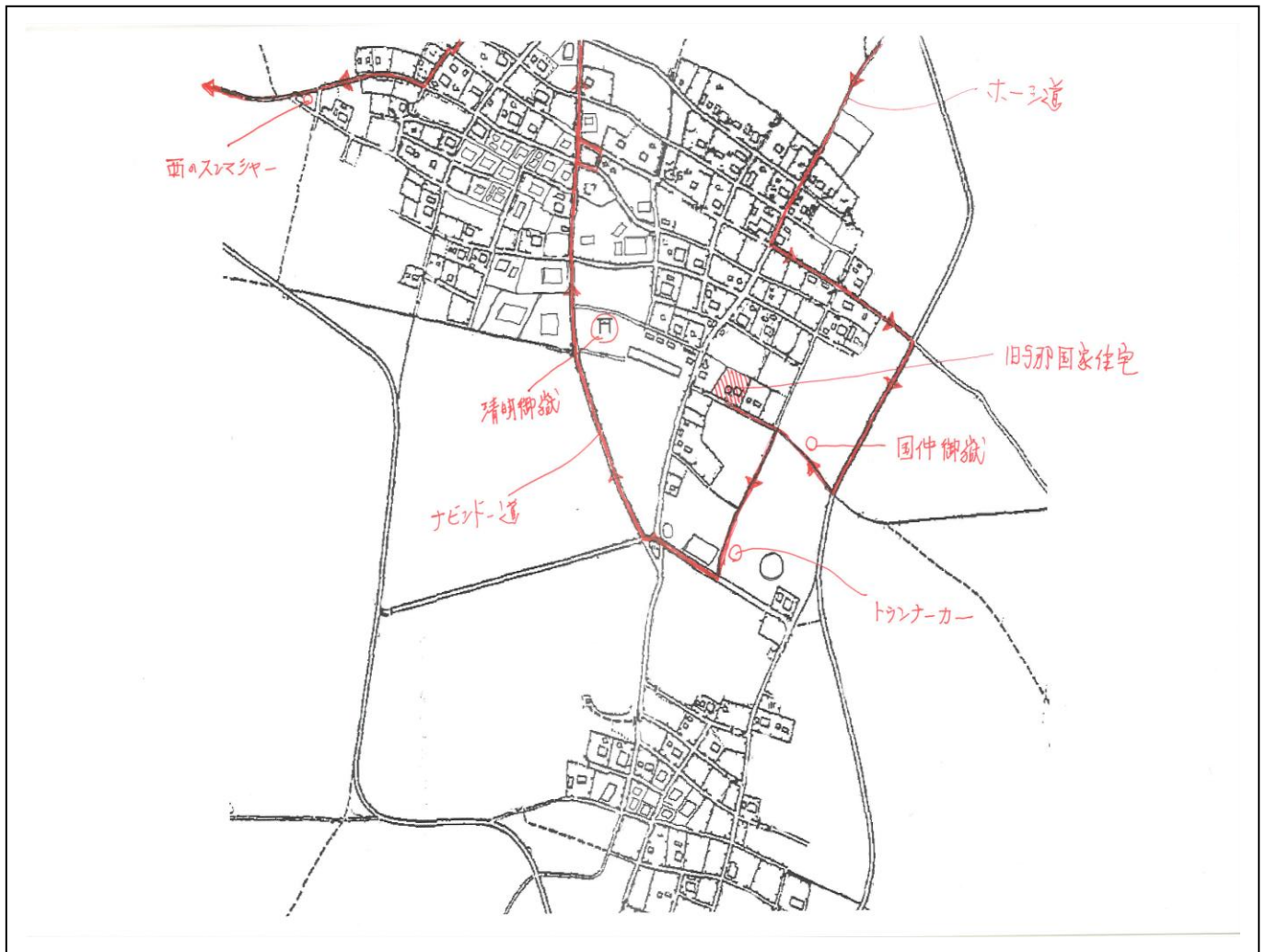
自然学習歩道を歩く



- ・ 日 時 : 令和5年1月21日 (土) 午前10時～午後12時
- ・ 主 催 : 西表石垣国立公園 竹富島ビジターセンター運営協議会
- ・ 解説員 : 阿佐伊 拓 (NPO たきどうん職員)

・ 順 路 :

- ① 竹富島ゆがふ館
- ② ホーシ道 (大舛線・さんばし通り)
- ③ 国仲御嶽
- ④ 旧与那国家住宅
- ⑤ トウンナー井戸・仲筋井戸
- ⑥ 清明御嶽
- ⑦ 世持御嶽
- ⑧ 真知御嶽
- ⑨ 西のスンマシャー
- ⑩ 真栄の遥拝所
- ⑪ 西栈橋



竹富島の道

普段何気なく使っている「道」。竹富島では、道に対する敬意がいたるところにみられます。白砂の道を島民が主体となって維持したり、ほうきの目を入れる習慣があったりしますが、こうした考え方は、昔からその道を使って暮らしを営み、生きながらえてきた感謝の念があるからです。集落の道に白砂を撒く習慣は伝統で、本来ならば、海砂を採取するのは法律で禁じられていますが、琉球政府時代から竹富島の住民は行政に働きかけ、慣習として特別に認められています。

現在では、観光業が生業となり大勢の観光客が訪れるため、ホーシ道は舗装され、新たに集落を取り囲む環状線が敷設されましたが、道を大切にする精神は現在でも生き続けています。



舗装される前のカイジ道（2009年撮影）

デイゴ（梯梧）

インド原産のデイゴは沖縄三大名花のひとつ。（他にオオゴチョウ・サンダンカ）

燃えるような赤い花は、沖縄県の県花として知られており、かつては沖縄島中南部では大規模な造林も行われ、竹富島では 1905 年に 11 本のデイゴを植樹したと記録されており、ホーシ道のデイゴ並木は、沖縄の花と緑の名所 100 選に選ばれています。

デイゴは畑に植えても作物に影響を与えないばかりか、落葉は肥料となり、耕作人に木陰を提供する大切な役割を担っていました。また、デイゴの花の風物詩といえば、学校の卒業式を彩るデイゴ、イトバショウ、テッポウユリの生け花といえるでしょう。竹富島の学校を卒業し、親元を離れる子どもたちを勇気づける生け花は、卒業生からの語り草となっています。

毎年 3 月下旬から花をつけ、来島する観光客の目を楽しませているデイゴですが、2006 年頃からあまり花をつけなくなりました。様々な要因がありますが、デイゴヒメコバチの寄生が最大の原因であると考えられています。

竹富島では 2010 年 3 月に発足した「竹富島のデイゴを救おう実行委員会」が、島内に群生する殆どのデイゴに薬剤を注入し、寄生するデイゴヒメコバチを駆除し、ふたたびデイゴの赤い花を見ることができるよう活動し、現在では竹富町がその業務を引き継いでいます。

なお、デイゴヒメコバチの生態は現在でも明らかにされておらず、先島以北では天敵が存在しないと云われており、現在でも多くのデイゴが枯死に至っています。

今後はデイゴヒメコバチの生態を解明し、薬剤に頼らず自然のメカニズムでデイゴを治癒できる方法を考えていく必要があると考えます。

竹富島の御嶽

竹富島の御嶽は、全部で28あります。御嶽は、神様となったご先祖やそのご先祖が招いた神様や、願いを重ねて拝所となったところなどがあります。今回の学習会では、いくつかの御嶽の前を通りますのでご紹介します。

① 国仲御嶽

『八重山嶋由来記』（1713）に掲載されている古い御嶽。沖縄島の園比屋武御嶽（そのひやんうたき）の神様をお招きしている。

② 仲筋御嶽

『八重山嶋由来記』（1713）に掲載されている古い御嶽。六山（ムーヤマ）のひとつ。新志花重成殿と沖縄島から招いた神様が祀られている。

③ 清明御嶽

八重山の島々を造ったオモト神とシンミンガナシの2神が祀られている。創建は不明。島のムトゥウガン。

④ 世持御嶽

世持神と農耕神の2神が祀られている。創建は1930年。種子取祭奉納芸能の際は、竹富島の神々がお集まりになる御嶽。

⑤ 玻座間御嶽

『八重山嶋由来記』（1713）に掲載されている古い御嶽。六山（ムーヤマ）のひとつ。根原金殿と屋久島から招いた神様が祀られている。

⑥ 真知御嶽

神霊によって石垣島の役人の大病を治癒したマートゥとフゾンの兄妹が祀られている。創建は不明。個人が管理する御嶽だが、竹富公民館の祭祀で参拝する御嶽。

旧与那国家住宅（マイユヌンヤー）

竹富島の集落は、島の農村集落として1987年に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。しかし、保存される家屋の殆どが個人宅であり、屋敷の間取りを詳しく説明できる家屋がありませんでした。こうしたなか、竹富島の伝統的な間取りを有し、かつ保存状態の良いマイユヌンヤー（前與那國屋・1913年築）を修復して、竹富島の家屋を訪れる人々に紹介できるよう文化庁と竹富町が保存に取り組みます。総工費は6,100万円、30ヶ月の期間をかけて解体修理工事を行いました。

竹富島の保存家屋の材木の殆どが西表島から伐採し、海を渡って運び、浜砂に数年埋めて材木に仕上げる大変な手間をかけています。そのため、修復にあたり、材質や年代、使用した工法など綿密な調査をしています。

なお、マイユヌンヤーは、2002年に所有者から竹富公民館へ譲渡され、翌年に竹富公民館から竹富町へ再譲渡し、2003年11月25日に「旧与那国家住宅」として竹富町有形文化財に指定されたのち、2009年に国の重要文化財に指定されています。



竹富島の井戸

新里村遺跡（AD12～13頃）で明らかのように、竹富島に渡来した先人たちは、海岸線の集落から徐々に内陸に移動し、島の中央部に集落を構成しました。その最大の要因は「水」の存在です。竹富島は、石垣島を構成する古生層（富崎層）の延長が島の東北部まで連なり、その古生層にサンゴが堆積して造られています。古生層と隆起サンゴの間に水が溜まり、その水を求めて人々は暮らし始めたのです。今回の学習会では、4カ所の井戸を通りますのでご紹介します。

① トゥンナーカー

採掘：不明 大工：不明 深さ：不明

伝承：宮古島の英雄、仲宗根豊見親が掘り当てたと伝えられている

願い元：波利若御嶽

② ナージカー

採掘：不明 大工：不明 深さ：不明

伝承：新志花重成殿の飼い犬が発見したと云われる。

現在の形は1937年に改修された

願い元：仲筋御嶽

③ アーラカー

採掘：不明 大工：不明 深さ：不明

願い元：玻座間御嶽

④ オーセカー

採掘：1895年 大工：有田加那、外部落民補佐 深さ：13メートル

願い元：玻座間御嶽

竹富島の自然環境

竹富島を訪れる人々は、「口々に美しい自然が身近にありますね」と仰ってくださいますが、実は、竹富島の自然は、御嶽の周辺と海岸線のみで、あとは人の手が加わった、人が管理すべき場所と言えます。

太平洋戦争（1941-1945）終結後、帰還兵や出稼ぎで島を離れていた島民が帰島し、竹富島には 2,000 人以上の人々が暮らしていました。終戦後の食糧難もあり、食糧増産のため島全体が畑と化していました。こうした暮らしの名残は、西表島から食糧を運ぶために拡張された西棧橋（1950 年）や、大勢の人々へ情報を共有するための放送台として建造されたなごみの塔（1953 年）などにみることができます。また、集落の至るところにみることが出来るイトバショウも同様に、バシャシン（芭蕉の着物）をつくるために植えた証です。

なお、現在では真っ先に駆除の対象となるギンネムは、薪の代用として台湾から持ち込まれています。



なごみの塔



真栄の遥拝所

島で語り継がれる人々

竹富島には六山の神々の英雄譚をはじめ、数多くの伝承が遺されています。また、テードゥンヒトゥ（竹富人）に大きな影響を与えた西塘大主は神として祀られ、節歌として歌い継がれるクヤマやヌベマ、イスケマなどは、現在では種子取祭の奉納芸能にて、私たちにその姿を偲ばせてくれます。

こうした語り継がれる人々のひとりに、マサカイ（真栄）という人物がいます。マサカイは、1701年、大山家の次男として生まれ、成人後分家して小山家を創設します。

マサカイはその後、多くの人々が望まない琉球王府の寄留民政策に自ら進んで西表島仲間村へ渡り、開拓精神を抱きつつ米づくりに励みます。

そのマサカイの類まれなる意志の強さを称え、現在でも「真栄節」として歌い継がれています。

MEMO